

## 石巻赤十字病院 救急支援

7月14日～7月25日 看護師・吉田 聡子さん

7月30日～8月15日 医師 ・小山 洋史さん

地震後の津波に襲われた石巻では、石巻市立病院が水をかぶって機能しなくなるなど、救急病院も被害を受けた。救急医療の機能を持ち被害を免れた石巻赤十字病院には、救急車の搬送患者が集中した。救急支援のため7月14日から25日まで吉田聡子看護師ら看護2人、7月30日から8月15日まで小山洋史医師が熊本から派遣された。

震災の後、石巻赤十字病院の救急担当の医師は次々と来院する急患の処置に追われた。自身が被災した人も多く、気にはなったが、病院の外に出る余裕はなかった。それでも、電気も水も来ていて医療活動が出来るだけでした。

7月、震災から4ヵ月半を経てなお、石巻赤十字病院では通常の1.5倍から2倍近い急患があった。患者は震災による外傷や感染症ではなく、日常的に発生する救急搬送患者や急病者の来院。市内の夜間急患センターが機能しなくなっていたことも、赤十字病院に急患が集中する一因になっていた。

吉田さんら全国から集まった8～9人の看護師が石巻入りした7月中旬、地元の病院が日中の診療を再開できるまでになっていたが、時間外や休日は石巻赤十字病院しかなかった。震災前、石巻地区では救急医療は市立病院と分け合っており、石巻赤十字病院は深夜までを中央処置室、夜間を2～3人で対応していた。それが地区の急患を一手に引き受けざるを得なくなり、診療室が不足して特設コーナーを設けた。現地スタッフにとって初めてのことで、支援に来たスタッフとともに、会議をしながら仕事の流れを模索し、日々やり方を変えながら手探りの活動が続いた。



吉田聡子看護師

吉田さんらは主に午前零時過ぎまでの準夜帯をカバーした。電子カルテと紙のカルテが混在していて、カルテが出来る1時間ほどの間に患者に対応することもあった。病院はほぼ平時に戻りつつあったが、救急外来だけは患者数が多く要員の支援を受けていた。

小山医師が支援に入った7月末、同じ時期には前橋から医師が来ていた。名古屋第二からはベテランの医師と研修医が一緒に来ていたし、名古屋第一からは研修医が地域医療の粋で来ていた。石巻市民病院が壊滅的な被害にあったため赤十字病院に移ってきたという医師もいた。

仕事は24時間態勢の救急外来。熊本は2交代制だが石巻は3



小山洋史医師

交代制で、1シフトあたりの医師の人数は熊本より少なめ。若い医師が多く、研修医がコールを受けるホットラインのPHSを持つこともあった。ほとんど院内の仕事で、1日だけ仮設住宅の地区の元避難所に往診に行き、午前中に7~8人を診察した。元避難所が仮の診療所になっていて、他の医療機関と交代で入っていた。

吉田さんらも小山医師も、宿泊はビジネスホテル。病院周辺の生活は震災の影響も払拭され、一見、通常の生活に戻っており、特に不便を感じることもなかった。ホテルのシーツ交換や部屋の掃除が7月中旬は4日間なくて、8月に入っても3日に1回。ホテルのスタッフが不足し、業者も被災したためだった。そのホテルにボランティアや復興関連の企業の人間が宿泊して

いた。

日赤本社の要請による救急支援の派遣は収束の時期を迎えていた。院内の仕事に従事し、「頑張らんといかん」と話す被災した人たちの声を聞き、被災地を見て、使命感ややりがいを再確認した医療スタッフも、少なくなかったのではないかな。